

# 鹿児島市照國神社境内石塔群の調査

渡辺芳郎・石田智子

## はじめに

本稿は、報告者らが2022年9月に実施した照國神社（鹿児島市照国町19-35）境内所在の石塔群の調査成果報告である。

鹿児島では、近世以来、「水神」「地神」「山神」などの銘を刻んだ小型の石塔を祀る習俗が見られ、現在でも個人住宅の庭の隅に建てられる例がある。民俗学ではそれらを「屋敷神」の一種としてとらえている（村田1975 pp.164-165）。一方、陶磁器を生産した窯場では開窯などに際して、「窯（竈）神」や「山神」などを祀った石塔を建てる事例があり、窯業集団による建立・祭祀と考えられる（渡辺2008）。さらに成尾常矩「鹿児島城本丸殿舎配置図」（明治6（1873）年）によれば、形態は不明であるが、本丸殿舎の「表」のほぼ中央部で「地神」が祀られている（鹿児島県教育委員会編1983 p.248）。また『鹿児島市史』第3巻「鹿児島の金石文」掲載の「水神」「山神」を祀った石祠には、施主として奉行や横目などの藩役人の名前が刻まれている（鹿児島市史編さん委員会編1971 pp.753-857）。つまり「地神」や「水神」に対する信仰、それにとともなう石塔建立の習俗は、個人や家から、集団や藩の上層部まで幅広い社会階層によって担われていたと推測される。

鹿児島では古くより石造物に対する調査研究が進められており、前掲『鹿児島市史』第3巻の「鹿児島の金石文」や、半世紀近い南九州石塔研究会の活動が知られる（南九州石塔研究会編2014）。また南九州に特徴的な田の神石像に対する民俗学的な関心も継続的に高い（八木2018など）。近年では、全国的な大名墓地や近世墓地・墓石の調査研究の活発化（関根2018、松原編2020など）を背景として、鹿児島でも調査研究事例が増加している（鹿児島市教育委員会編2014、新田2021、松田2004など）。

しかし本稿で報告する小型の石塔に関しては、これまで網羅的、体系的な調査研究はなされていない。そこで報告者らは、その基礎情報の収集を目的として、照國神社境内に残る石塔群の調査を実施した。本石塔群は、後述するように別所から移されたものであり、本来の所在地や所有者などに関する情報が欠けているが、65基にのぼる資料数は、石塔の形態や祭神のヴァリエーションを把握する上で有効であると考えている。

## 1. 照國神社と境内石塔群

### (1) 照國神社について

神社の祭神は薩摩藩11代藩主・島津斉彬（1809～58年）である。島津斉彬は安政5（1858）年7月に50歳で急逝し、文久2（1862）年に弟・久光と甥・忠義（12代藩主）が、鹿児島城内西部の南泉院内に斉彬を祀る社地を選定する。文久3年5月11日に孝明天皇の勅命による「照國大明神」の神号授与を受けて祠を造営したのが創祀である。元治元（1864）年に改めて東照宮（祭神：徳川家康）が建っていた地に社殿を造営し、照國神社と称した。明治6（1873）年に県社に列し、同15年には別格官幣社に昇格した。幕末・維新时期における斉彬の功績と薩摩藩の役割が考慮されたと考えられる。

### (2) 境内石塔群について

石塔群は神社境内西北隅に所在する。入り口に「水宮」の額を掲げた鳥居が建ち、その奥に約23.5mの石敷きの参道が敷設されている。一番奥に「水神」を祀る石塔が置かれ、その左側（西側）に84基の石塔などが2～4列で並んでいる。また鳥居の外側（南側）に、石塔1基、石祠3基、石灯籠1基が置か

れている。鳥居内外の計 89 基を調査対象とした (図 1)。これらの石塔群は、本来、照國神社において祀られていたものではない。神社の方の話によると、先代の宮司の頃より、改築や転居、後継者不在などで祀れなくなった石塔を引き取っていたという。その引き取りも一度ではなく、要望に応じて随時、断続的になされた。それゆえ、これら石塔群の配置は恣意的であり、また石塔が、いつ、どこ(誰)から移されたかという情報をまったく欠いている。



図 1 石塔群遠景

## 2. 調査の概要

本調査は鹿児島大学法文学部人文学科の「考古学実習 1」の一環として実施した。

調査日程：2022 年 9 月 9 日(金)～11 日(日)

調査参加者：野口遼太(法文学部 2 年生)、大塚茉凜・澄田豪大・鳥山翔平・野村亮輔・宮川真聖・吉富礼華(同 3 年生)、寺田悠乃(同 4 年生)、鬼塚勇斗(鹿児島大学大学院人文社会科学研究科 1 年生)、渡辺芳郎・石田智子(教員)(所属はいずれも調査当時)

調査内容

- (1) 石塔 1 基ずつの記録カードの作成および写真撮影。
- (2) 平板測量による石塔配置図の作成。
- (3) LiDAR スキャナ搭載の iPad (Apple 社) を用いた石塔群配置図および石塔(一部)の 3D モデルの作成。

## 3. 調査成果

一番奥(北側)の石塔を No. 1 とし、南に向かって番号を振っていった。なお以下文中の「No.」は表 8 と図 2・7 のそれに対応する。

### (1) 種類

本報告では「石塔群」という総称を用いているが、厳密な意味での石塔を、「水神」「地神」などの祭神銘を刻んだ小型の石塔に限定する。ただし風化などのため祭神銘が判読できないものの上記の石塔と形態的に共通するものも含む。その数は総数 89 基のうち 65 基である。石塔以外に、石祠・自然石・石灯籠・仏像・墓石・仁王像頭部・恵比寿像・屋敷形石製品がある(表 1)。まず石塔について整理、報告する。

表 1 石塔群の種類

種類	基数
石塔	65
石祠	9
自然石	7
石灯籠	2
仏像	2
墓石	1
仁王像頭部	1
恵比寿像	1
石製品	1
合計	89

### (2) 石塔の形態

石塔の形態分類に際しては、関根達人による墓石形態の分類(関根編 2012 pp. 28-32)を参照した。石塔には台石をとともうもの(41 基)とないもの(24 基)とがある。前者のうち 1 基は二段の台石を作る(No. 64)。台石と石塔の石材の大部分は凝灰岩で、一部に花崗岩が見られる。台石と石塔が同一石材のものがあるが、異なる例もある(No. 2・12・33・52・55・63 など)。つまり石塔と台石の組み合わせが本来的なものか、本地に移築後に組み合わせられたものかは判断できない。台石には単純な直方体のものが多いが、前面両端を隅欠状に作るもの(No. 31・36・42)、石塔前面部もしくは左右に花立穴や水鉢を彫るものなどもある(No. 5・36 など)。

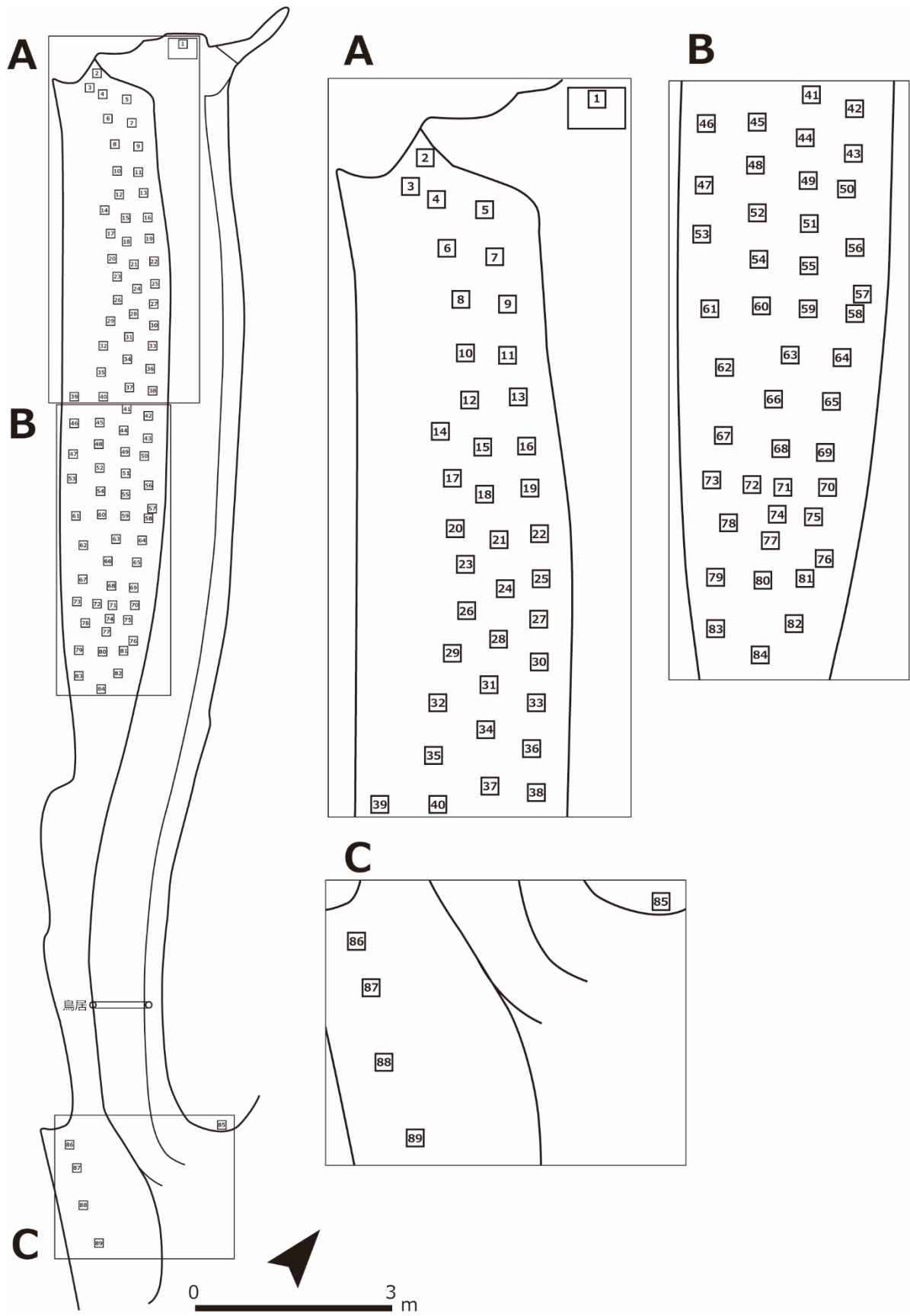


図2 照國神社境内石塔群配置図

石塔本体の形態は尖頭角柱形 38 基、駒形 18 基の二者で 9 割近くを占める（図 3、表 2）。

台石を除く尖頭角柱形の幅と高さには、幅 10～25 cm、高さ 20～50 cm の変異があるが、両者はおおよそ幅×2＝高さの関係にある。尖頭角柱

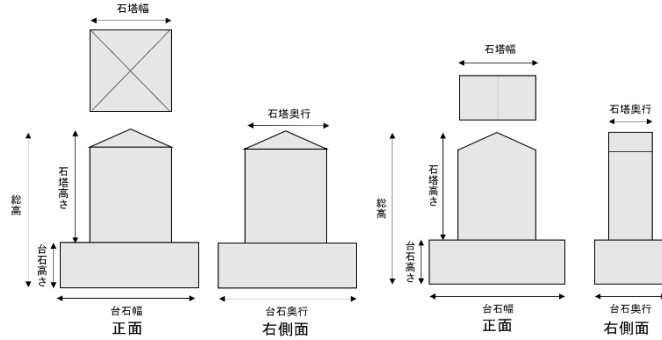


図 3 尖頭角柱形と駒形石塔

表 2 石塔の種類

石塔形態	基数
尖頭角柱形	38
駒形	18
平頭角柱形	3
不定形	2
石祠形	1
平頭駒形	1
六角無縫塔	1
不明	1
合計	65

形の正面形態は長方形（No. 6 など）と台形（No. 7 など）に細分できる。幅×高さの関係は両者に差異はない。また石塔幅×奥行の関係から、断面正方形のものが主体であることがわかる（図 4 左）。

駒形の幅と高さは幅 15～30 cm、高さ 30～60 cm の変異がある。両者の関係は幅×2＝高さを中心としつつも、その変異幅は尖頭角柱形より広い。正面形は長方形（No. 24 など）と台形（No. 17 など）に細分できる。幅×高さは前者より後者がやや小型である。幅×奥行から、断面正方形のものと横幅の広い板状のものがあることがわかる（図 4 右）。

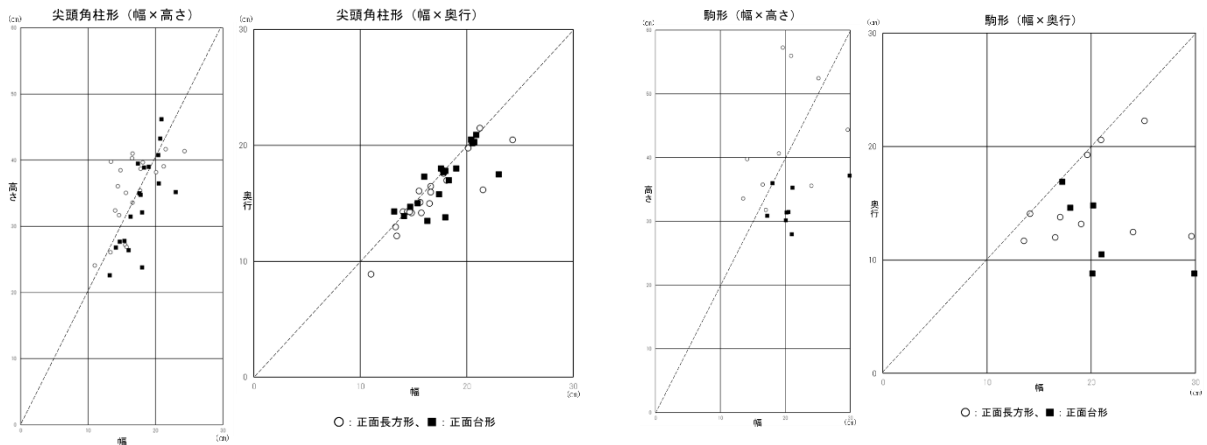


図 4 尖頭角柱形と駒形石塔の法量

平頭角柱形 3 例（No. 4・18・66）は、近世以後に普及する墓石形態に近い。不定形 2 例（No. 2・27）は、原石の打ち欠き面をそのまま残し、正面に長方形の平坦面を磨きだして、祭神銘を刻する。石祠形（No. 47）は屋根を載せるが、本来の組み合わせかどうかは疑問が残る。このほか平頭駒形（No. 62）、六角無縫塔形（No. 79）が各 1 例ある。上半部が損壊しているため全体形不明のものが 1 例（No. 74）ある。

### (3) 石塔の祭神

石塔には祭神 1 柱のみを刻む場合もあるが、複数刻まれる事例も多くある。それゆえ 65 基の石塔に刻まれた祭神銘は、不明も含め 89 柱である（表 3）。

このうち「水神」が 34 柱ともっとも多いが、「地神」28 柱、「地眼」9 柱がある。「地眼」は、鹿児島において、たとえば「田の神」を「たのかん」と呼ぶように、「神」を「かん」と読むことから、「地神＝ヂガミ＝ヂガン＝地眼」という転換が考えられる。村田熙は「ジガン」の字として「地神」「地眼」を挙げており、両者が同じものであることを示唆している（村田 1975 pp. 164-165）。今回の調査例でも、「地神」「地眼」と「水神」などが同一石塔に刻まれる場合はあるが、「地神」と「地眼」とがセットになることはない（後述）。つまり「地神」と「地眼」とを同一と考えると、両者の合計 37 柱は「水神」よ

表3 祭神の種類

祭神	基数	比率(%)
水神	34	38.2
地神	28	31.5
地眼	9	10.1
山神	6	6.7
荒神	6	6.7
氏神	3	3.4
他	1	1.1
不明	2	2.2
計	89	100.0

表4 一石塔の祭神数

祭神数	基数
1	42
2	11
3	7
4	1
計	61

表5 祭神の組み合わせ

祭神組み合わせ	基数
水神＋地神	8
水神＋地眼	1
水神＋氏神	1
地眼＋荒神	1
水神＋地神＋山神	4
水神＋地神＋荒神	2
水神＋地神＋水天狗	1
水神＋地神＋荒神＋氏神	1
計	19

り多いことになる。両方で8割を占め、少なくとも本群ではもっともポピュラーな祭神と言える。なお『伊集院由緒記』に「竹ノ山村之内往還筋涯」「苗代川 御仮屋より寅卯之方道法二里半拾二町四拾間程」に「地之眼」があり、「右者薩隅日三州ニ一ヶ所宛地之眼有之、右薩州之地之眼之由申伝候」とあることから、「地之眼」という名称が近世からあったことがうかがわれる(天保9(1838)年写、塩満編1974 p.6)。ただし音が通じるとは言え、「神」が「眼」になぜ転換し、定着したのかについては、別に考えねばならない。

次いで多いのが「山神」6柱、「荒神」6柱である。ただし「荒神」には「山伏荒神」(No.13)、「カン(梵字)三寶荒神」(No.18)、「南無三寶大荒神」(No.66)、「伏荒神」(No.79)がある。「荒神」は、火の神・火伏せの神(三宝荒神)、屋敷神・同族神・部落神(地荒神)、牛馬の守護神など多様な性格を持ち(直江1994)、また鹿児島では土地の神である「地神」と近いものであるという(小野1981 pp.94-103)。一方、「山伏荒神」「伏荒神」は修験道との関係を思わせる。島津氏と霧島修験とが密接な関係を持っていたことは指摘されているが(森田2020)、石塔のそれとどのような関係にあるかは、今のところ不明である。3例ある「氏神」(No.33・73・78)は言うまでもなく一族の始祖を表すものである。その他として「水天狗」がある(No.55)。山の神としての「天狗」は想定できるが、「水天狗」の名は寡聞にして知らない。「水天宮(すいてんぐう)」の聞き誤り、誤記ではなかろうか。

複数の祭神銘を刻する石塔は19基ある(表4・5)。その中でも「水神＋地神(地眼)」の組み合わせが多い。先述したように「地神」と「地眼」との組み合わせはない。

石塔の中には祭神銘が削り取られている事例が見られる。銘を完全に削り取ってしまう場合(No.8)もあれば、「神」の部分のみ薄く削り取っているものも見られる(No.49など)。また削り取ったのちに改めて再刻字したと推測される例(No.42)もある。これらは廃仏毀釈をはじめとした明治政府による宗教政策(明治元(1868)年:神仏判然令、同3年:天社禁止令(陰陽寮廃止)、同5年:修験道禁止令など)の中で、さまざまな民間信仰が抑圧された(安丸1979)結果と想定することができる。その場合、不徹底な削り落としや再刻字の試みには、民間信仰を排除しようとする側と、それに対抗したり、あるいはすり抜けたりする側との間の微妙なバランスが現れているようにも考えられる。ただし個別的な理由による削り落としもありえるので、すべてが宗教政策に由来するかどうかは、今後の検討課題である。

#### (4) 石塔の形態と祭神との関係

石塔の形態と刻された祭神との関係では、数量の多い尖頭角柱形と駒形の間では大きな差異は認められない。ただ「山神」「氏神」の二者が、駒形にやや偏る傾向があるようにも見える(表6)。

表 6 石塔の形態と祭神との関係

石塔形態	基数	水神	地神	地眼	山神	荒神	氏神	他	不明	祭神数
尖頭角柱形	38	20	14	5	1	2		1	1	44
駒形	18	11	11	2	5	1	3			33
平頭角柱形	3	1	1	1		2				5
不定形	2	1	1							2
石祠形	1			1						1
平頭駒形	1	1	1							2
六角無縫塔	1					1				1
不明	1								1	1
計	65	34	28	9	6	6	3	1	2	89

#### (5) その他の石造物

その他の石造物として「石祠」9例がある。ただし石祠はあくまで「容器」であり、ご神体はその内部に納められたと考えられる。石祠の中には丸石などが置かれている事例 (No. 87) もあるが、それが本来のご神体であったかどうかは不明である。また祠には石製の屋根を置くが、一部の石祠では両者の組み合わせが本来的なものかどうか疑問が持たれるものもある (No. 54)。自然石は9例ある。丸石単独もしくは集積したもの (No. 14・15・59 など) と立石のもの (No. 53・72 など) とがある。

仏像は2体あるがともに頭部～上半部が欠損している (No. 43・46)。また仁王像の頭部のみが1例見られる (No. 50)。これらは幕末・明治初期の廃仏毀釈で破壊され、廃棄されたものと考えられる。石灯籠は2例ある。1例は石灯籠の台座と柱の部分のみが残る (No. 28)。もう1例は、その銘文から明治33 (1900) 年に「氏神神社造立」にあたって建立したものであることがわかる (No. 89)。この「氏神神社」がどこにあったのかは不明である。「隠士の霊」と彫られたものは墓石とした (No. 48)。このほか鯛を抱える恵比寿像 (No. 77) や、屋敷を模した石製品 (No. 83) がある。後者は庭園などに置かれたと思われる。

#### (6) 祭神銘以外の銘文

紀年銘を有する石塔などは計7例ある。近世のものとして文化13 (1816) 年 (No. 6)、文久2 (1862) 年 (No. 32) の2例、近代以後では、明治7 (1874) 年 (No. 25)、同13 (1880) 年 (No. 25)、同33 (1900) 年 (No. 89)、昭和4 (1929) 年 (No. 81)、同54 (1979) 年 (No. 68) がある。石塔では古いもので文化13年、新しいもので昭和54年であり、近世から近現代にかけて継続的に製作されていることがわかる。

このほか建立者を示す銘文などがある (No. 36・No. 73・No. 89)。このうち No. 73 は、左側面に「国道工事ノタメ移転」とあり、元々は別の場所にあったものを移転し、さらに最終的に照國神社境内に移されたと推測される。

#### (7) 三次元計測の実施

石塔の立体形状を記録することを目的として三次元計測を実施した。使用機器は LiDAR スキャナ搭載の iPad Pro (Apple 社) で、3D スキャンアプリ Scaniverse を利用して計測した。石塔群全体の配置の記録 (図5)、一部の石塔の3Dモデルを作成した。石塔の3Dモデル作成にあたっては、Agisoft Metashape によるフォトグラメトリも併用している。作成した3Dモデルの一部は、3DCGモデル共有サイト Sketchfab に登録・公開している。公開しているものは10基 (No.6・11・13・27・32・45・50・62・79・80) で、QRコードからもアクセス可能である (図6)。

3D スキャンの操作は非常に簡単で、計測から 3D モデル作成まで数分で終了した。3D モデルを作成することで、多方向からの観察が可能となる。石塔が近接して観察が難しい側面や、石祠の屋根の裏側などの現地では見えにくい場所も、3D モデルでは細部まで観察できる。石塔表面の風化や光の位置のため現地では読み取りにくい銘文も、画像調整や角度を変えて観察することで明瞭に認識できる。石塔をはじめとする石造文化財は従来写真のみで報告されることが多かったが、石造文化財の三次元計測（永見 2017）をより活発に実施することで、数多くの石造文化財の記録を残すとともに、図面作成や形態的特徴の検討が進展することが期待される。

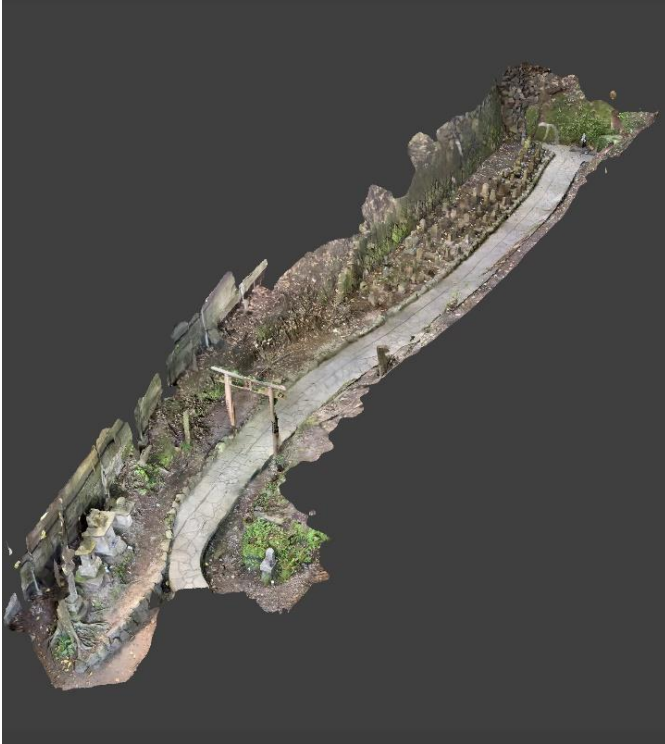


図 5 石塔群配置の 3D モデル



図 6 石塔No.6 の 3D モデル

## おわりに

以上、照國神社境内石塔群について報告してきた。最後にまとめておきたい。

石塔の形態は「尖頭角柱形」と「駒形」が多くを占めており、この両形態がもっとも一般的に見られるものと言えよう。ただし両形態ともその法量には変異が見られる。その違いが時期差や地域差、造営主体の身分や経済力、あるいは信仰形態などに結びつくのかどうか、今後の検討課題である。

祭神としては「水神」と「地神（地眼）」が多く見られる。冒頭でも述べたように、これらに対する信仰や石塔建立の習俗は、近世の鹿児島では幅広く浸透していたと推測される。一方、「山神」は 6 例と、1 割に満たない。窯場の石塔では、「窯（竈）神」とともに「山神」が多く見られる点とやや傾向を異にする（表 7）。窯

表 7 窯跡石塔の祭神（渡辺 2008）

祭神	柱数
窯（竈）神	6
山神	5
地神	3
荒神（三宝荒神）	3(+1?)
水神	2
土神	1
天照大神	1

場の多くが山の傾斜面を利用し、また窠そのものを「皿山」など「山」と呼ぶことから、「山」への信仰の現れとしてとらえるならば、「水神」「地神（地眼）」は逆に「町」や「里」、宅地など生活空間に近い場所において、より重視されたのかもしれない。石塔の立地と祭神との間に関係があるのかどうか、本来の場所に残る石塔の調査事例を増やすことで検証されよう。

また祭神銘を削り取った事例について、明治以後の宗教政策と関係する可能性を指摘した。削り取り例すべてがそれに由来するか、現段階では確定が難しいが、徹底して実施された鹿児島県の廃仏毀釈の具体的様相を知る手がかりにもなる可能性がある。

鹿児島の神社の境内には、今回の照國神社ほどの数ではないにしろ、石塔などが集められている場合がある。それらを調査・資料化することで、これまでまとまった情報のない各種石塔についての知見が深まると考えている。またその調査方法として三次元計測の有効性も確認することができた。今後も調査を継続することで、情報を蓄積していきたい。

### 参考引用文献

- 小野重朗 1981『民俗神の系譜—南九州を中心に—』法政大学出版局 東京  
鹿児島県教育委員会編 1983『鹿児島（鶴丸）城本丸跡』同委員会 鹿児島  
鹿児島市教育委員会編 2014『県指定史跡 福昌寺跡（島津家墓所）』同委員会 鹿児島  
鹿児島市史編さん委員会編 1971『鹿児島市史』第3巻 鹿児島市 鹿児島  
塩満郁夫編 1974『伊集院由緒記』鹿児島県史料拾遺 15 鹿児島県史料拾遺刊行会 鹿児島  
関根達人編 2012『松前の墓石から見た近世日本』北海道出版企画センター 札幌  
関根達人 2018『墓石が語る江戸時代—大名・庶民の墓事情—』吉川弘文館 東京  
直江広治 1994「荒神」『日本民俗事典【縮刷版】』pp. 245-246 弘文堂 東京  
永見秀徳 2017「石造物の三次元記録」『季刊考古学』140 pp. 42-43  
新田栄治 2021「薩摩藩上級家臣の墓制に見る伝統と規制」『鹿児島考古』50 pp. 213-230  
松田朝由 2004「島津本家における近世大名墓の形成と特質」『鹿児島県立埋蔵文化財センター研究紀要 縄文の森から』2 pp. 91-108  
松原典明編 2020『近世大名墓の考古学』勉誠出版 東京  
南九州石塔研究会編 2014『鹿児島県の石塔図録（第一集）—中世—』同会 鹿児島  
村田熙 1975『日本の民俗 46 鹿児島』第一法規 東京  
森田清美 2020『島津氏と霧島修験—霊山霧島の山岳信仰・その歴史と民俗—』鉾脈社 宮崎  
安丸良夫 1979『神々の明治維新—神仏分離と廃仏毀釈』岩波書店 東京  
八木幸夫 2018『田の神石像・全記録—南九州の民間信仰—』南方新社 鹿児島  
渡辺芳郎 2008「薩摩焼窠神石塔小考」『九州と東アジアの考古学—九州大学考古学研究室 50周年記念論文集—』下巻 pp. 697-712 九州大学考古学研究室 50周年記念論文集刊行会 福岡

### 謝辞

今回の調査にあたっては、照國神社の皆様たいへんお世話になりました。心よりお礼申し上げます。また調査中にご来訪いただき、ご指導いただいた中村直子氏・寒川朋枝氏（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター）、新里貴之氏（沖縄国際大学）、松崎大嗣氏（指宿市教育委員会）、松崎美咲氏（南さつま市教育委員会）、帖佐秀人氏（日置市文化財保護審議会会長）にも感謝申し上げます。



表8 照國神社境内石塔群一覽(1)

番号	種類	石塔形態	台石有無	台石法量 (cm)		石塔法量 (cm)		総高 (cm)	銘文	石材	年代	備考	
				幅	高さ	幅	高さ						
1	石塔	尖頭角柱形	有	76.0	53.0	11.2	16.0	37.6	正面:水神	凝灰岩		「水」字幅損大、背面に削り痕。台石部ニシテト軸強	
2	石塔	不定形	有	19.8	14.2	6.7	17.3	31.4	正面:水神	凝灰岩		自然石風、右塔の接地面不安定	
3	石塔	尖頭角柱形	無				16.3	31.5	正面:地神(右)、水神(左)	凝灰岩		右前面から側面に損傷(「地」字一部欠け)	
4	石塔	平頭角柱形	有	32.6	32.2	18.0	22.0	47.6	正面:地眼か	凝灰岩		刻銘の損傷大(意図的な削りか)	
5	石塔	尖頭角柱形	有	33.5	33.2	12.2	15.6	47.3	正面:水神	凝灰岩		台石上面に穴(直径6.0、深4.0cm)。銘文の彫り深い、	
6	石塔	尖頭角柱形	有	39.4	37.0	19.4	24.3	60.8	正面:文化丙子(右)、水神(中央)、七月吉日(左)	凝灰岩	文化13(1816)年		
7	石塔	尖頭角柱形	有	29.8	30.0	14.2	13.2	36.8	正面:水神	凝灰岩		左正面から側面損傷大、右塔右側に丸石	
8	石塔	尖頭角柱形	有	32.1	31.5	23.5	21.2	62.6	正面:口□	凝灰岩		刻銘は意図的に削り落とし	
9	石塔	尖頭角柱形	有	34.0	25.7	21.9	17.7	57.3	なし	凝灰岩		風化により刻銘消失か	
10	石塔	尖頭角柱形	有	29.8	29.8	17.2	16.5	57.5	正面:地神(右)、水神(左)	凝灰岩		右塔四隅面取り	
11	石塔	駒形	有	26.3	28.5	23.0	17.0	54.8	正面:水神(右)、地眼(左)	凝灰岩		台石上面右手前に穴(直径8.0、深6.0cm)	
12	石塔	尖頭角柱形	有	30.0	29.5	23.6	18.3	62.5	正面:水神	凝灰岩		右塔上部右側破損。「水」字一部欠損	
13	石塔	尖頭角柱形	無				20.9	46.2	正面:地神(右)、山伏荒神(左)	凝灰岩			
14	自然石	自然石	無				20.3	16.4	12.9				丸石4
15	自然石	自然石	有	30.3	30.1	20.0	29.5	17.7	37.7				丸石
16	石塔	駒形	無				17.2	16.9	30.9	正面:地神			
17	石塔	駒形	有	29.6	29.9	11.4	21.0	39.4	正面:地神	花崗岩			背面に自然石(幅41.6、奥行15.5、高22.0cm)、右塔下半部に紐を回す
18	石塔	平頭角柱形	無				20.3	17.2	45.1	正面:カン(梵字)三寶荒神			
19	石塔	駒形	有	23.3	33.2	22.6	16.5	58.4	正面:地/水神	凝灰岩			台座に穴あり(直径8.0、深さ4.0cm)
20	石塔	駒形	有	39.4	26.9	14.0	20.1	44.2	正面:山神(上)、水神(右下)、地神(左下)	花崗岩			背面に自然石2
21	石塔	尖頭角柱形	有	26.4	25.2	20.8	13.4	60.6	正面:地神	凝灰岩			
22	石塔	尖頭角柱形	無				17.8	38.7	38.7	正面:地眼			左側面から背面に欠損
23	石塔	駒形	無				19.6	57.3	57.3	正面:水神			右側面から背面にかけて欠損
24	石塔	駒形	無				25.1	52.5	52.5	正面:山神			
25	石塔	尖頭角柱形	無				16.6	16.5	41.0	正面:地神、右側面:明治十三年二月			
26	石塔	尖頭角柱形	有	23.4	23.4	24.3	20.7	67.6	正面:水神	凝灰岩	明治13(1880)年		
27	石塔	不定形	有	19.6	13.7	14.3	19.6	47.3	正面:地神	凝灰岩			
28	石灯籠		有	38.0	31.0	23.8	23.1	63.3		凝灰岩			背面に欠損。台石:蓮華座、塔身:六面
29	石塔	尖頭角柱形	有	29.8	30.1	11.5	20.4	52.3	正面:水神	花崗岩			
30	石塔	尖頭角柱形	無				14.0	32.4	32.4				
31	石塔	尖頭角柱形	有	19.5	15.6	20.0	17.4	59.5	正面:地神	凝灰岩			表面風化大。本来は銘あり?
32	石塔	尖頭角柱形	有	28.7	28.8	24.0	19.0	63.0	正面:地眼、背面:文久三壬戌二月	凝灰岩	文久2(1862)年		台石前面の角部にえぐり
33	石塔	駒形	有	30.0	29.7	13.5	13.5	47.1	正面:氏神(右)、水神(左)	凝灰岩			台石上面に穴(直径5.5、深4.5cm)
34	石塔	尖頭角柱形	有	39.2	30.0	18.0	23.0	53.2	正面:水神	凝灰岩			台石上面に穴(直径5.0、深4.1cm)
35	石塔	尖頭角柱形	有	39.7	30.5	16.0	20.5	52.5	正面:水神	凝灰岩			台石上面に穴(直径8.1、深さ13.0cm)、右塔背面に欠損
36	石塔	尖頭角柱形	有	21.2	26.6	18.0	13.3	44.1	正面:水神(右)、地神(左)、背面:〇〇家	凝灰岩			台石前面角部にえぐり。台石に線香置き(横幅10.9、奥行3.5、深1.7cm)
37	石塔	尖頭角柱形	有	28.5	24.1	20.1	14.1	46.9	正面:地神	凝灰岩			

表8 照國神社境内石塔群一覽(2)

番号	種類	石塔形態	台石有無	台石法量 (cm)		石塔法量 (cm)		總高 (cm)	銘文	石材	年代	備考
				幅	高さ	幅	高さ					
38	石塔	尖頭角柱形	無			18.1	17.0	39.7	正面:地眼	凝灰岩		背面上半に欠損
39	石祠		有	33.0	33.5	19.8	16.8	18.7		凝灰岩		屋根(幅45.8、奥行41.2、高さ25.6cm、四隅欠け)
40	石塔	駒形	無			20.9	20.6	56.0	正面:剝離か	凝灰岩		背面側面欠損
41	石塔	尖頭角柱形	無			20.1	19.8	38.2	正面:地眼	凝灰岩		上半部欠損大、「地」字欠損。
42	石塔	尖頭角柱形	有	25.8	33.5	15.5	16.1	27.2	正面:水神	凝灰岩		「神」字部分剝離か削り。改めて刻字か? 台石前面に半円形の突出部。台石上面に穴(直径8.3、深2.5cm)
43	仏像		有	29.7	30.0	9.8	19.5	44.2		凝灰岩		上半部欠損。台石コンクリート
44	石塔	尖頭角柱形	有	30.0	29.7	11.8	14.2	38.5	正面:水神	凝灰岩		上半部欠損後修復
45	石塔	駒形	無			29.6	12.1	44.4	正面:山神(上)、水神(右下)、地神(左下)	凝灰岩か		
46	仏像		無			29.7	25.0	42.8		凝灰岩		上半部欠損
47	石塔	石神形	無			23.7	23.9	30.2	正面:地眼	凝灰岩		屋根:幅26.0、奥行29.7、高16.7。屋根は後載せか?
48	臺石	丘状頭角柱形	有	上22.1、 下33.0	上13.6、 下11.5	15.6	12.7	36.5	正面:隠士の靈	凝灰岩		
49	石塔	駒形	有	28.8	24.2	19.2	14.6	36.0	正面:地神(右)、水神(左)	凝灰岩		「神」2字削り
50	仁王像頭部		無			28.2	25.7	25.0		凝灰岩		前面に供齋台(幅10.5、奥行10.3、高さ5.8cm)
51	石祠					19.6	15.7	28.3		凝灰岩		祠前面中央部穿孔(幅5.2、高17.5、厚4.0cm)、屋根:幅31.0、奥行32.0、高15.0
52	石塔	尖頭角柱形	有	30.1	29.8	10.2	14.7	27.7	正面:地神	凝灰岩		台石別石か
53	自然石		有	38.7	14.6	13.2	18.5	39.5		凝灰岩か		台石フロック
54	石祠		有	30.0	29.1	8.8	30.6	23.2		凝灰岩		屋根:幅33.7、奥行38.0、高18.6cm
55	石塔	尖頭角柱形	有	30.2	30.0	12.3	15.4	27.8	正面:水口(右)、水天狗(中)、地神(左)	凝灰岩		正面右側欠損。「水天狗」は「水天宮」の誤記か?
56	石塔	尖頭角柱形	無			14.4	14.3	36.1	正面:水神	凝灰岩		上半部右側欠損
57	石塔	尖頭角柱形	無			11.0	8.9	24.1	正面:地神	凝灰岩		
58	石塔	尖頭角柱形	無			14.6	14.3	31.7		凝灰岩		表面風化大、本来は鏡あり?
59	自然石		有	30.0	30.2	11.4						台石上に丸石2、自然礫4、瓦器製大黒像
60	石塔	駒形	有	27.1	29.8	20.7	14.8	31.4	正面:地眼	凝灰岩		台石上に穴(直径7.0、深2.8cm)
61	石祠		有	45.0	51.4	29.6	17.0	25.2		凝灰岩		台石自然石。石祠中央に円形穿孔(径7.0cm)
62	石塔	平頭駒形	有	32.4	40.0	18.0	25.9	40.5	正面:地神(右)、水神(左)	花崗岩		台石上に穴(直径6.5、深12.5cm)
63	石塔	尖頭角柱形	有	30.5	39.3	15.5	16.6	33.6	正面:水神	凝灰岩		台石上に自然石2、台石上面に穴(直径6.7、深さ8.0cm)と水鉢(幅6.0、長10.0、深3.8cm)。石塔凝灰岩、台石花崗岩。
64	石塔	尖頭角柱形	有	上22.3、 下30.2	上9.0、 下5.4	18.0	17.8	32.1	正面:水神(右)、地神(左)	凝灰岩		
65	石塔	駒形	有	38.3	32.9	2.1	24.0	35.6	正面:山神(上)、水神(右下)、地神(左下)	花崗岩		
66	石塔	平頭角柱形	有	30.2	30.2	10.0	19.9	35.9	正面:水神(右)、南無三寶大荒神(中)、地神(左)	花崗岩		台石前に香炉台(幅15.5、奥行15.5、高12.9cm、穴直径10.2、深さ12.0cm)
67	自然石		無			16.4	35.2	11.3		凝灰岩		
68	石塔	尖頭角柱形	有	38.9	28.2	13.5	15.7	26.9	正面:水神(右)、荒神(中)、地神(左)、背面:昭和五十四年一月吉日	凝灰岩		背面に自然石1
69	石塔	尖頭角柱形	有	30.6	26.5	13.8	18.0	23.8	正面:山神	凝灰岩		昭和54(1979)年
70	石塔	尖頭角柱形	無			21.5	16.2	41.7	正面:水神	凝灰岩		台石・石塔各角部面取り

表8 照國神社境内石塔群一覽 (3)

番号	種類	石塔形態	台石有無	台石法量 (cm)		石塔法量 (cm)		銘文	石材	年代	備考
				幅	高さ	奥行	高さ				
71	石祠		無			24.3	19.9	53.4	凝灰岩		屋根:幅23.5、奥行25.0、高17.6cm。祠中央穴:幅9.0、高12.0、厚5.0cm
72	自然石		無			28.3	14.0	34.5	凝灰岩		
73	石塔	駒形	有	26.2	28.0	14.1	14.1	39.8	凝灰岩		正面:自然石2、正面・両側面の銘文周囲に刻線で縁取り。背面に縁取りなし。
74	石塔		無			16.2	14.7		凝灰岩		途中で欠損(残高19.3cm)
75	石塔	駒形	無			19.0	13.2	40.7	凝灰岩		中段に補修痕、背面上部損傷、背面鑿痕多数
76	石塔	尖頭角柱形	無			17.8	17.7	34.8	凝灰岩	明治7(1874)年	
77	恵比寿像		有	26.5	27.0	22.3	19.1	36.9	凝灰岩		
78	石塔	駒形	有	36.7	21.5	29.9	8.8	37.2	花崗岩		
79	石塔	六角無縫塔	無			15.7	12.5	20.0	凝灰岩		正面左側欠損
80	石祠		無			21.0	17.5	34.0	凝灰岩		屋根:幅34.5、奥行33.4、高19.0cm。正面に穴(直径7.0cm)
81	石塔	尖頭角柱形	無			17.6	18.0	35.0	凝灰岩	昭和4(1929)年	「神」の中棒が長い
82	石塔	駒形	無			20.5	10.0	31.5	凝灰岩		
83	石製品	石製品	無			41.5	25.0	50.0	砂岩か		庭に置かれる屋敷形石製品か
84	自然石		無			30.0	25.5	57.0	凝灰岩		
85	石塔	駒形	有	32.2	34.1	21.1	12.2	35.3	花崗岩		石の上に穴(直径6.8、深11.2cm)。背面に自然石
86	石祠		無			21.8	21.6	47.8	凝灰岩		屋根:幅47.7、奥行50.0、高36.4cm。祠本体コンクリート、屋根は凝灰岩製で四隅をコンクリート補修。屋根と本体は別個体か
87	石祠		有	53.2	75.0	42.8	42.2	57.3	凝灰岩		屋根:幅75.9、奥行69.7、高37.4cm。中央に方形穿孔(幅22.3、高40.1、深0.2cm)。内部に自然石。台石前面に参道形。
88	石祠		有(2段)	上37.9、下62.9	上28.3、下22.3	25.7	21.4	37.2	凝灰岩		屋根:幅50.2、奥行44.9、高29.2cm。本体中央に方形穿孔(幅7.8、高21.4、厚16.9cm)。台石前面に花入台(幅13.2、奥行14.1、高29.5cm)
89	石灯籠		有(2段)	上32.6、下57.9	上26.0、下17.4			198.0	凝灰岩	明治33(1900)年	

※なお個人情報保護の観点から、銘文中の個人名や家名は伏せ字にした。



图7 照國神社境内石塔群写真 (1)



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32

图7 照國神社境内石塔群写真 (2)



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48

图7 照國神社境内石塔群写真 (3)



49



50



51



52



53



54



55



56



57



58



59



60



61



62



63



64

图7 照國神社境内石塔群写真 (4)



65



66



67



69



68



70



71



72



74



75



73

图7 照國神社境内石塔群写真 (5)





76

77

78

79



80



81



82



83



84



85



86



87



88



89



图7 照國神社境内石塔群写真 (6)